

2020年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2021年12月26日

2. 提出者氏名：高橋香苗

3. 申請した研究テーマ：働く女性の服装規範に関する研究

4. 研究活動報告

2019年、女性が職場でハイヒールの着用を求められることに対する抗議運動、いわゆる#KuTooが起こった。この抗議運動をめぐって、しばしばハイヒールの着用は社会通念であるという言及がされてきた。しかしながら、ハイヒールの着用に代表されるような職場における女性の服装に関する社会通念がどのように形成されてきたのかということについて、これまであまり焦点が当てられてこなかったという現状がある。職場における女性の服装規範はどのように成立し、拡散、共有、変容してきたのだろうか。こうした問題意識から、本研究は歴史資料として働く女性を読者に想定する雑誌を分析することを通じて、女性の職場における服装規範に関する言説の展開について探ることを目的とした。これまでの作業としては、講談社から1955年に創刊され、1982年に休刊した女性雑誌『若い女性』の誌面のうち、見出しに「通勤」や「BG（ビジネスガール）」といった言葉を含む職場におけるファッションを主題とする記事を収集して分析をおこなった。

これまでの作業を通じて『若い女性』からわかったことは、女性の職場におけるファッションには、職場の花としての男性うけと社会人としての矜持の表現という二つの期待があったということである。

創刊1年目から休刊までの期間を5年ごとにみていくと、まず、創刊1年目は、「ラベンダー色の化繊ソフト・メルトンで作った上品なトッパー・ラベルから自然に折り返った前はボタンなしのつき合わせで、巾広い箱ポケットがアクセントになっています。(1955年10月号p.98)」といった記述のように、テキストは素材やデザインといった衣服の作り方に重きが置かれた記述が中心で、画像表現では職場で働くイメージが描かれていた。

創刊5年目でもテキストの傾向は変わらず、衣服の素材などに関する説明が中心であった。一方で創刊年とは異なり、画像表現では勤務や通勤のイメージが必ずしも描かれているわけではなく、働くイメージが曖昧であることが指摘できる。

創刊10年目になると、男性うけという志向が徐々に目立つようになる。1月号の「オフィスで着る服」はその例で、「男性に絶対うける落ち着いたこけ色は、フラノ。(1964年1月号p.58)」といったように、男性からの評価を意識させるような記述があった。またストーリー仕立てで1週間分のコーディネートを提案する記事があるものの、そのストーリーでは具体的な仕事のイメージが描かれていないことが指摘できる。

創刊 15 年目の頃には、毎号で通勤服の記事が組まれるようになっていく。この頃になると、一週間のコーディネイト提案記事のストーリーにおいて、「会議の進行」「キビキビと仕事をさばく」（1964 年月 6 号 pp. 54-55）といった記述がされるようになり、仕事のイメージが具体化されている。画像表現においても通勤中や工作中を想起させる演出がされるようになり、働くイメージが徐々に明確化していることが指摘できる。職場でのエチケットを解説する記事においては、職場で服装に気を配らないのも、派手なメイクや衣服も男性うけが悪いといった記述があり、「いつも変わらぬいぶし銀のような美しさで、男子社員のイライラした精神をまろやかにし、外にたいしては、企業イメージのよきでない手であること。」というおしゃれのエチケットが語られていた（1964 年 3 月号 p. 144）。こうした男性うけ志向の強調は創刊 20 年目、25 年目にも継続してみられた。

創刊 25 年目の記事に注目すると、女性たちは職場で異なる期待の間で揺れ動かされていたことが示唆される。1979 年 3 月号の新社会人向けの記事には「やはり男性は一緒に連れて歩ける女、を好ましいと思うんじゃないですか。」という語りがある一方で「会社の一員であるという責任とプライドは必要ですね。」という語りがあった（1979 年 3 月号 pp. 70-98）。このような記事からは、職場の花として女性らしさや男性うけが重要である一方で、社会人としての責任感や矜持も求められていたことが示唆される。

休刊年になると、ファッションの場面よりもアイテムにフォーカスする記事が多くなり、職場のファッションを中心にした記事は少ないといえる。職場でのタブーを特集した記事では、流行に無関心な人は男性に敬遠されるが、仕事への意欲がファッションを通じて感じられることも必要だと語られるなど、ここでも仕事に対する責任感と男性にうけるおしゃれという異なる二つの期待があることが指摘できる。

『若い女性』を通じて 1950 年代から 1980 年代の働く女性たちのファッションを検討した結果、男性に気に入られる女性であることと仕事への意欲を表現することという二つの期待があったことがわかった。もちろん、上述した内容は暫定的な結果である。今後は、分析を精緻なものにしつつ、研究成果として発表していくことを予定している。また 1980 年代以降の様相を捉えるために別の雑誌も使った分析にも取り組みたいと考えている。